

韓信についての覚え書

—— 史記淮陰侯列伝を読む ——

勝 藤 猛

A Story of Han Xin

Takeshi KATSUFUJI

After the breakdown of the Qin empire, there was a leader named Liu Bang (247-195 B.C.), who built the Han dynasty. Among his followers, three men were particularly efficient, and brought him to the throne. First, Zhang Liang was a staff-officer, so to speak, with female appearance. He gave his master valuable advice at the headquarters. Secondly, Xiao Ho was a well-educated paymaster in charge of supplying the front with personnel and provisions, searching and arranging documents from the destroyed Qin court. Finally, Han Xin, here under discussion, was an able army commander, good at intelligence service as well as tactics.

The first two were in their sovereign's high esteem, while the last fell into disgrace and was killed in the end. Court chronicler Si-ma Qian writes a hundred years later, "One who has more courage than one's lord will be easily ruined. One whose success is above all will not be awarded". This is the destiny of Han Xin. The author tries to describe a hero of a tragedy.

まえがき

韓信は、秦の滅亡後、漢王朝成立までの時期の実力者のひとりである。はじめ楚の項羽に従っていたが、そこを去って、項羽の好敵手たる漢王＝劉邦に仕えるようになった。彼は劉邦が項羽を破って漢王朝を建てるのに大いに貢献したが、劉邦に疑われ、結局は殺される。本稿は司馬遷の筆になる史記の淮陰侯列伝によって、韓信の活動を叙述しようとするものである。

史記が韓信を「淮陰侯」と表記したのは、彼の称号の最後のものを用いたのである。それ以前、彼が斉国の王になってからは、斉王、それから楚に移って楚王となり、のち高祖＝劉邦にうとまれて淮陰侯に格下げされた。

参考訳注書：

田中謙二・一海知義『史記一楚漢篇』（新訂中国古典選）朝日新聞社、1967年。収録するのは、項羽本紀、高祖（劉邦）本紀、蕭相国（蕭何）世家、留侯（張良）世家、黥布列伝、淮陰侯列伝。および田中の解説「項羽と劉邦」。

小川環樹・今鷹真・福島吉彦訳『史記列伝』3（全5冊）岩波文庫、1975年

同『史記世家』下（全3冊）同、1991年

I 日本における韓信

韓信と聞けば「股くぐり」と答えるほど、彼の忍耐が知られている。その有名な話のものは、『幼学綱要』⁽¹⁾にあるのではないか。その巻之五、忍耐第十二に次のようにある。

漢ノ韓信ハ、淮陰ノ人ナリ、家貧シ、嘗テ下郷南昌ノ亭長ニ從テ食ス、亭長ノ妻之ヲ苦ム、

信去リ、城下ニ至テ釣ス、一漂母有リ、之ヲ哀テ、信ニ飯スルコト数十日、信漂母ニ謂テ曰ク、吾レ必重ク母ニ報ゼム、母怒テ曰ク、大丈夫自ラ食スルコト能ハズ、吾レ王孫ヲ哀テ、食ヲ進ム、豈報ヲ望マムヤ、

淮陰ノ少年、又信ヲ侮テ曰ク、長大ニシテ、好テ刀劍ヲ帶ブト雖モ、中情ハ怯キノミ、之ヲ衆辱シテ曰ク、能ク死セバ、我ヲ刺セ、死スルコト能ハズバ、跨下ヲ出ヨ、是ニ於テ、信熟視シ、俛テ跨下ヲ出ツ、一市皆信ヲ笑ヒ、以テ怯シト為ス、

後ニ漢ノ大将ト為リ、高祖ヲ佐ケテ、楚ヲ滅シ、天下ヲ定ム、蕭何張良ト并セテ、三傑ト称ス、

(文章は史記淮陰侯列伝によっている。韓信はのちに漂母と少年に返礼した。「死ス」の意味は「殺す」)

韓信にかかわり我が国で人口に膾炙した語句は以下のとおり：

1 一玉霰漂母が鍋をみだれうつ 蕪村

「漂」とは田中・一海によれば「綿を水で洗ってさらすこと」というが、簡単に洗濯と取ってもよからう。韓信は上記のように、若い時に漂母(洗濯おばさん)の家に居候したことがある。この句は、庶民の家庭で、鍋を台所でなく軒下に置いてあり、その鍋に音をたててあられが降ってきたという情景である。

2 一股くぐり(上述)

3 一狡兎死して良狗煮られ、高鳥尽きて良弓蔵わる「狡兎死良狗煮、高鳥尽良弓蔵」(役立つうちは使われて、役が終われば捨てられる)(本稿第IV章)

4 一国土無双(蕭何がこの語で韓信を評して劉邦に推薦した。「またと得難い国家的人材」田中・一海)。麻雀の役の一でもある。

5 一敗軍の将は兵を語らず「敗軍之将、不可以言勇」(III)

6 一背水の陣「背水陳」陣=陳(III)

II 史記・漢書の中の韓信

史記は正史の第一。前漢、武帝の時代の人、司馬遷が五帝(伝説上の5人の天子)から武帝までの歴史を描く。漢書は正史第二。後漢、班固の撰、前漢すべてを扱う。正史の体裁は司馬遷の創作であり、本紀は皇帝の、世家は諸侯の、列伝は個人や外国の伝記で、紀伝体とよばれる。世家は漢書からなくなる。天下は皇帝の支配下にあり、封建諸侯を認めない、というたてまえによる。史記にはほかに表と書がある。漢書以後、表はなくなり、書は志となる。

司馬遷は正史の体裁を作ったけれども、いくつかの例外を設けている。形式にとらわれず、実状を正しく表現するためである。史記・漢書での関係箇所を下に示す(数字は巻の数)。

史記(“まとめ”を参照)

7—項羽本紀 8—高祖本紀 9—呂太后本紀
53—蕭相国世家 55—留侯世家 56—陳丞相世家
92—淮陰侯列伝

漢書

1—高帝本紀 2—惠帝本紀 3—高后本紀
31—陳勝・項籍列伝
34—韓信・彭越・黥布・盧縮・呉芮列伝

40—張良・陳平・王陵・周勃列伝

45—蒯通ほか列伝

北宋の司馬光の編になる資治通鑑では、巻10・11=漢紀2・3がこの時期を扱い、史記・漢書双方を利用している。

簡単な人物紹介

項羽：姓は項、名は籍、字(あざな)は羽。前233~202。史記項羽本紀・漢書項籍伝に「初め起ちし時、年二十四」という。司馬遷は皇帝になれなかった彼を本紀に入れる。

劉邦：前247~195。在位、前206~195。漢書高帝本紀の本文「帝崩ず」の注にいう「帝は年四十二にして即位、即位すること十二年、寿五十三。」前206年とは、劉邦が秦の三世皇帝=子嬰を降伏させた年である。史記ではこれを「漢の元年」として年代を数え始める。この時、項羽はまだ健在で、その勢いは劉邦を凌ぐほどであった。劉邦が項羽を打倒して名実ともに帝位に即いたのは、前202年、漢の5年である。彼の廟号は太祖、諡は高皇帝、だから漢書は高帝本紀とする。高祖は当時の彼の通称、ゆえに史記では高祖本紀。漢書でも本紀の文中では高祖とする。即位以前の称号は、沛公、ついで漢王。

項羽の生涯の最後8年ほど(項羽本紀「吾、兵を起こしてより今に至るまで八歳なり」)、つまり前210~202年ごろは、劉邦の人生と重なり、両者の事蹟はほぼ共通である。司馬遷は、項羽本紀を“文学”としておもしろく、高祖本紀を“歴史”としてつまらなく、書き分けた。現在の我が国で、項羽本紀は高校国語教科書にも採られているのに反し、高祖本紀は中国史家にすら無視されている。

呂氏：劉邦の妻。皇后として呂后、劉邦の死後は呂太后。皇帝ではなかったが、史記本紀にはいっている。

惠帝：劉邦と呂氏の子で、二代目皇帝。しかし史記に惠帝本紀はない。劉邦の死後、権力は呂氏の手にあったからである。

蕭何：相国は宰相

張良：留侯に封ぜられた。

陳平：丞相(宰相)

蒯通：名は徹、武帝=劉徹と同名なので、それを避けた。漢書蒯通列伝は史記淮陰侯列伝から、蒯通の場面を分離独立させたもの。パートン・ワトソンはいう：韓信の伝記から蒯通の長い誘惑の言葉を移し変えることは、韓信がくりかえし自己の忠誠を述べる抗弁の姿と、結局は呂后に殺される悲劇を、弱める結果となる、と。⁽²⁾なお趙翼、廿二史劄記、巻2、「漢書は史記の文を移置す」「漢書は伝を増す」にも簡単な言及あり。

III 韓信のかしこさ

韓信の知恵をもっともよく示すのは、趙の兵法家たる広武君=李左車に対する敬愛の念であろう。史記淮陰侯列伝によれば、漢の2年(前205)8月、韓信は魏を平定したあと、趙を目標とした。

趙では韓信の動きを知って対策を練った。李左車の提案を成安君=陳余は採用しなかった。この情報を韓信が得た。「韓信、人をして間(ひそ)かに視(み)しめ、其(李左車の策)の用いられざるを知り、還りて報じたり。」

趙を攻めるには、井陘という狭い道を通らねばならない。そこでは、隊列は細長くなり、輜重(補給部隊)はずっと後に取り残される。李左車の作戦は敵の補給部隊を奇襲しようというのである。しかし陳余はその案を退け、正攻法でやることにした。奇襲作戦は韓信の方が採用した。すなわち小部隊を伏兵として潜ませ、主力軍が趙軍を攻める。趙軍は反撃する。韓信軍はいつわって逃げる。趙軍は喜び、自軍の陣地をカラにして総力で追撃する。そこで伏兵が行動を起こし、カラになった趙の陣地を占領し、漢軍のしるし赤旗を立てる。これを見て趙兵は戦意を失う。

彼はこの戦場でふたつの心理作戦を実行した。その一は、リラックスである。其の裨将(副将)をして殫(弁当)を配らせていう「今日、趙を破りて会食せん。」勝つのが当然というやりかたで、部下も信用しなかった。もうひとつ、常識に反する戦法を実施した。これが“背水の陣”で、極度の緊張を強いるものである。我が国で背水の陣はよく知られているが、弁当配給の方はそうでない。緊張だけでは事がうまくいかない。

趙との戦いに勝ち、予定どおり李左車を生きたまま捕らえ、韓信は礼を尽くして教えを乞う。李は「敗軍の将は以て勇を言うべからず」と辞退するが、韓信は「僕、心を委(ゆだ)ねて計に帰せん」と頼む。魏と趙を撃破して武力を示した韓信を、李はこう評価する「名は海内に聞こえ、威は天下に震う。……然れども衆は勞(つか)れ、卒は罷(つか)れ、其れ実に用い難し。今、將軍(韓信)は倦弊の兵を挙げて、これを燕の堅城の下に頓せしめんと欲す。……臣愚、竊かに以為(おも)うに、過(あやま)てり。……、牛と酒を日々に至らしめ、以て士大夫に饗し、兵を酔わしめんに如くは莫し。」兵士の疲労を癒やし、栄養を補給し、そのあとで燕と斉に向かって“声”(言論)による攻勢をかけよと説く。賢明な韓信は「其の策に従い、使いを發して燕に使わす。燕は風に從いて靡く。」戦争において重要なのは、攻撃とか武器だけでない。

休養や補給を忘れてはならないこと、第二次世界大戦の日本軍の心がけるべき教訓であった。

次は対斉戦略である。斉に対しては、漢王=劉邦はすでにひそかに酈食其という弁士を派遣し、斉王=田広を降伏させていた。その上また韓信に武力攻撃を命じた。韓信は斉の降伏を知って、攻撃を止めようと思った。そこへもうひとりの弁士である蒯通という人が来て、言う「食其は一介の弁士に過ぎないのに、三寸の舌をふるって斉の70余城を降伏させた。韓信よ、あなたは数万もの軍勢を率い、1年余もかかって趙の城50余を服従させたにすぎない。將軍は弁士に劣るのか。攻撃を止めよという漢王の命令は出ていない。」韓信は憤然として武力行使を決意する。斉では、降伏したのに攻撃されたのは、だまされたものと思い、食其を殺す。

楚の項羽は、隣国=斉を救援すべく、將軍=竜且を遣わす。ある人が彼に、漢軍は郷里から遠く離れているから、必死で戦う。一方、斉と楚の兵は、地元で戦うから敗散しやすい。しかし漢軍は地元民に背かれたら食糧を得る手段がない、といて、宣伝工作をすすめる。竜且はそれを退け、戦って勝つことだけを考える。「戦わずしてこれ(斉)を降さば、吾、何の功かあらん。」言論でなく、武力を行使するのが手柄であると考える人である。果たして韓信の“砂袋の計”に敗れる。それはこうである。多数の砂袋を作り、それで川を堰き止める。味方は水のない川を通して敵の方へ進む。敵が反撃して来る。味方は退却し、敵は追撃して来る。味方がこちら岸に着き、敵がまだ川床にいる時、砂袋を一斉に取り除く。川の水はどっと流れ始め、川床にいる敵兵を溺れさせる、というのである。

この川の名は、史記には濰水とある。今、山東省の濰河、東北流して萊州湾に注ぐ。黄河や長江のような大河でなく、日本にもある川を想像すればよかろう。

IV 韓信のまじめさ

竜且を失った楚の項羽は、武渉という者を斉王=韓信の所へやって説得させる。その要旨は淮陰侯列伝によれば以下のようなものである。「当今、二王(項羽と劉邦)の事、権(均衡)は足下(あなた)に在り。足下が右に投ぜば則ち漢王(劉邦)が勝ち、左に投ぜば則ち項王が勝たん。項王、今日亡べば、則ち次は足下を取らん。足下、項王と故ある(以前に項羽の下にいた)に、何ぞ漢に反きて楚と連和し、天下を三分して、[三人で]之に王たらざるや。」武渉はまた「漢王は必ずべからず(劉邦は信用できない)」とし、あなたが彼のためにいくら努力しても、最後には彼に捕らえられるであろう

と、韓信の運命を予言する。

韓信は武渉の申し出を謝絶する。その理由：「漢王は我に上將軍の印を授け、我に数万の衆を予（あた）え、我に衣（き）せ、我に食（くら）わせ、言は聴かれ、計は用いらる。人が深く我を信任せるに、我がこれに倍（そむ）くは不祥なり（よくない）。」

武渉のあと、蒯通が説得に来る、二度も来る。趣旨は武渉とまったく同じである。

「当今、両主（項羽と劉邦）の命は足下に懸る。足下、漢の為にせば漢が勝ち、楚に与（くみ）せば則ち楚が勝たん。……天下を三分して、鼎の足のごとくして居るに若（し）くはなし。」

通は朋友・君臣関係崩壊の前例を挙げて、「野獸、已（すで）に尽きて、獵狗（狩猟用の犬）煮らる」という教訓を引き、これまた韓信の不運を予告する。韓信は後で劉邦に陥れられて「狡兎死して良狗煮られ、高鳥尽きて良弓蔵（おさ）めらる」という諺を思い出す。

通の説得の執拗さに韓信は悲鳴を上げ、「先生、且（し）ばら）く休（や）めよ、吾、まさにこれを念（おも）わんとす」と、逃げる。

韓信は「人の車に乗る者は、人の患（うれ）いを載せ、人の衣を衣（き）る者は、人の憂いを懐（いだ）き、人の食を食う者は、人の為に死す」という感動的語句をを引いたあと、「吾、豈（あ）に以て利に嚮（む）かい、義に倍（そむ）くべけんや」と、劉邦への義理を優先させる。

通はこうも言う「臣聞く“勇略が主を震わす者は身危うく、功が天下を蓋う者は賞せられず”と。今、足下は主を震わす威を戴き、賞せられざる功を挾（たの）む。楚に帰するも楚人は信ぜじ。漢に帰するも漢人は震え恐れん。足下、是（これ）を持ちて安（いず）くに帰せんと欲するか。」

威あり功ある韓信には、漢も楚も安住の地でないと、この不気味な弁士はいう。この説得に韓信は迷いに迷う。結局、劉邦と絶縁して独立する決心がつかない。

V 史記における身ぶりの描写

A 韓信の場合

1 淮陰侯列伝：行為の原因となった韓信

漢の四年、遂に「楚の卒は」皆な降り、齊を平（た）い）らぐ。人をして漢王に言わしめて曰く「齊は偽詐にして変多く、反覆の国なり。南は楚に辺す。仮王を為して以て之を鎮めずんば、其の勢い定まらざらん。願わくは、仮王と為らば便ならん」と。是の時に当たり、楚は方（まさ）に急に漢王を滎陽に囲む。韓信の使者至る。書を発（ひら）きて、漢王、大いに怒り、

罵りて曰く「吾、此（ここ）に困しみ、且暮に若（なんじ）の来たりて我を佐（たす）けんことを望むに、乃ち自ら立ちて王たらんと欲す」と。張良・陳平は漢王の足を躡（ふ）み、因りて耳に附きて語りて曰く「漢は方に不利なり。寧（なん）ぞ能く「韓」信の王たるを禁ぜんや。因りて立てて善く之を遇し、自ら為に之を守らしむるに如かず。然（しか）らずんば、変生せん」と。漢王も亦た悟る。

躡＝蹈、ふむ。漢書韓信列伝・資治通鑑もほぼ同文。

2 留侯世家：行為をした張良

漢の四年、韓信、齊を破る。……漢王は怒る。張良が漢王に説く。漢王は張良をして齊王の印を授けしむ。語は淮陰の事中に在り。（動作は書いてない。淮陰侯列伝を見よ、と）

3 陳丞相世家：行為をしたもうひとりの陳平

淮陰侯（韓信）が齊を打ち破り、自分で齊王と名乗った。使者が来て、[そのよしを]漢王に告げた。漢王は、向かつ腹を立ててどなりつけた。陳平が漢王の足をふんで「注意した」ので、漢王も「韓信を敵にしてはまずいと」気がついた。それより、齊の使者を手厚くもてなした。また、張子房（張良）を派遣し、けっきょく韓信が齊王の位につくことを確認したのである。（小川ほか『史記世家』下）

4 高祖本紀：行為をされた劉邦

[漢の4年]韓信は已でに齊を破り、人をして言わしめて曰く「齊は楚に辺し、権は軽し。仮王となさずんば、恐らくは齊を安んずること能わじ。」漢王はこれを攻めんと欲す。留侯（張良）曰く「因りてこれを立て、自ら守りを為さしむるに如かず。」乃ち張良を遣わして印綬を操（と）らしめ、韓信を立てて齊王となす。

足を踏まれたとは言わず、「漢王欲攻之。」「攻める」とは何か。漢王＝劉邦が足を踏まれてたしなめられる、ではまずいから、彼の体面を保つためにこの表現をしたのであろう。高祖本紀は劉邦の伝記の表座敷である。

B 張良の場合

留侯世家に見える劉邦と張良の具体的動作

漢の3年、項羽が漢王＝劉邦を滎陽に包囲し、劉邦が危機に陥った。劉邦は楚の力を弱めようとした。酈食其（前出の弁士）が案を出す、秦に滅ぼされた六国の子孫を復活させれば、彼らはその恩返しに我が方に付いてくれるであろう、と。劉邦はさっそく六国封建の書類の印を作り、食其に与えて行かせようとする。そこへ留侯＝張良が来る。劉邦は飯を食っており、今、食其から聞いたばかりの案を良に話す。良は劉邦の箸を取り上げ、それをを用いて自分の意見を述べる。劉邦

を周の武王と比較して見下す。結局、楚の力を弱める策は出ないでおしまいとなる。そして劉邦は、六国の子孫を封ずるために作ってあった印をつぶす。

司馬遷は留侯世家を芝居の台本として書き、劉邦を舞台上に上がらせ、ぶざまなしぐさをさせることにより、劉邦を軽蔑する。食事をしている人から箸を取り上げるのは無礼の極みである。ここのところを田中・一海は「箸を借りて指し示すとは、地図を前に軍事計画をめぐらす時の癖が出たのであろうか」と、まじめに考えている。

同じ話は漢書張良列伝にも載っている。史記の項羽本紀・高祖本紀には見えない。宮崎市定はこれを、張良が封建制に反対した事実と取るが⁽³⁾、私はフィクションと考える⁽⁴⁾。

VI 史記における本文と“太史公曰”の矛盾

“太史公曰く”は、各巻の最後にあり、史官である司馬遷が自分の意見を述べたものである。淮陰侯列伝の末尾で司馬遷はいう、

太史公曰、……仮令韓信学道、謙讓不伐己功、不矜其能、則庶幾哉。於漢家勲可以比周・召・太公之徒、後世血食矣。不務出此、而天下已集、乃謀畔逆、夷滅宗族、不亦宜乎。

「もし韓信が、道理を学び、控えめで、自分の手柄を誇らず、能力を自慢しなかったら、理想に近いことを実現しただろう。漢王室において、功績は周の周公・召公・太公らに比べられ、後世、皇室の廟に祭られたであろう。彼はおのれの枠から出る努力をせず、天下がすでに定まったあとで反逆を図った。一族が皆殺しになったのも当然ではなからうか。」（田中・一海）

本文で韓信を賞賛しているのと矛盾する。“まとめ”参照。

貝塚茂樹は李斯列伝についていう：世間の人々が同情するところは本文のなかで同情し、それを“太史公曰く”で逆転するのが、司馬遷の表現方法である。（中略）蒙恬についても司馬遷は世間とはちがった評価をしている、と。⁽⁵⁾淮陰侯列伝には言及がない。

李斯は秦の政治家、始皇帝の政策として知られる天下統一・郡県制・文字や度量衡の統一・焚書坑儒などは彼の助言による。蒙恬は軍人で、匈奴との戦争に功績があった。

太史公曰で似た表現を拾うと

——李斯伝 「[李] 斯之功、且与周・召列矣」
——淮陰侯伝 「於漢家、勲可以比周・召・太公之徒」
周公＝旦（武王の弟）。召公＝奭（周公の弟）。太公＝太公望呂尚（文王・武王の師）

——蒙恬伝 「此其兄弟遇誅、不亦宜乎」
——淮陰侯伝 「夷滅宗族、不亦宜乎」

本文で褒めて太史公曰でけなすのはなぜか。司馬遷は、賛否両論を出して、外部からの批判を逃れるつもりか。

VII 中国文学における君主の描写

史記の留侯世家・淮陰侯列伝で、司馬遷が劉邦を愚か者として描いているのはなぜか。彼は武帝により宮刑（生殖器を切断する刑）に処せられた。その怨みから武帝の先祖をこきおろすのかとも考えられる。しかしながら別の理由もありうる。

資治通鑑、巻65＝漢紀57、建安13（西暦208）年の条、“赤壁之戦”（小川環樹・西田太一郎著『漢文入門』⁽⁶⁾所収）を、平成10年度後期「日中比較文化論演習」のテキストとして読んだ。そこで、君主が愚かで臣下が賢明なように描かれていることに気が付いた。以下、話の筋を紹介する。

通鑑のこの条は、正史たる三国志の、巻35、蜀書、諸葛亮列伝／巻54、呉書、周瑜列伝／同書、魯肅列伝を使っている。

“三国時代”が始まろうとする時、北に魏があり、その主は曹操である。王朝としてはなお後漢で、最後の皇帝で少年の献帝が有力者たち一董卓、ついで曹操一に擁立されていた。南の方、長江下流域には呉があり、君主は孫権であった。もうひとり、後に蜀を建てる劉備はまだ固有の領土をもたず、諸葛亮（あざな孔明）・関羽・張飛らとともに長江中流の荊州の牧（知事）＝劉表に身を寄せていた。劉備・劉表は劉姓が示すとおり、漢王室の血を引くといわれる。

劉表が死んだ。曹操は南下して荊州をねらう。劉備は逃げなければならない。呉では魯肅が君主に策を献じて、劉備と同盟して魏に当たろうとする。肅の言葉が終わるやいなや、権は肅をつかわす「権即遣肅」。臣下の意見は君主の頭を素通りして実行に移される。魯肅は行って劉備に会う。備は蒼梧郡（今の広西省内）の太守と旧知なので、それに頼るといふ。しかし肅は、そこは辺地だからやめて、東の方、呉の孫権と手を握れと助言する。

肅は備と亮を伴って呉へ戻る。もし劉備が蒼梧郡へ行っていたら、彼は歴史に名を残すことはなかったであろう。亮は、曹操と対決せよと孫権を説得する。「今、あなたは、後漢皇帝（曹操が操っている）に服従するという名目で、実はぐずぐずして、結局は曹操に降伏するつもりですか。」

亮にこうけしかけられると、権は急に強気になり、

「降伏などしない、決心はついた。」「しかし、ねえ、兵力が足りない……」とまだ心配する。そこで亮は、自信をもって必勝の策を権に述べる。

そこへ曹操から孫権宛ての手紙が届く、「八十万の水軍を率いて行き、呉国であなたと共同の狩りをしたい」と。武力で攻撃するぞという脅しである。

孫権は恐れて群臣の会議を開く。まず降伏を主張する意見が出る。権はその場の雰囲気になんて耐え兼ねて、「更衣する」(便所へ行く)。肅が後を追う。権は肅の手を取る。君主が臣下にすがりたい気持ちであろう。肅は「戦わないでどうしますか。もし降伏するなら、我々下っ端は再就職できますが、君主たるあなたは行くところありませんよ。」

権はなんとか気力を奮い起こして「降伏論はけしからん。おまえの意見はわたしの意見だ。」

そこへ周瑜が現われる。彼は権の兄で暗殺された孫策の友人、呉では高い地位にある。彼も対魏必勝の策を述べる。その発言に勇気づけられた孫権は、刀を抜いて、机とその上の書類を叩き切る。なんとも滑稽なしぐさ、臆病者のカラ元気である。

一方、劉備も負けずに愚物である。自分自身の兵力をもたず、呉の水軍をあてにしているから、不安で仕方がない。毎日、見張りの者をして呉の軍船の到来を望見させる。やっと来た。周瑜と劉備の会話：

備「兵力はいくらか。」

瑜「3万。」

備「少ないのではないか。」

瑜「十分です。あなたは私が勝つを見るだけでよろしい。」

備「魯肅に会いたい。呼んでくれないか。」

瑜「彼はいま軍務多忙です。あなたの方から出かけて行きなさい。」

植村清二は歴史学者らしく、文献どおりの事実を叙述するだけで、君臣の心理には言及していない。⁽⁷⁾

君より臣の方が立派な書き方を理解するのに、次の説明はすこぶる有益である。

山本七平と駒田信二の対談⁽⁸⁾のなかで、駒田は言う「中国人の徳は、無能でありながら絶対であること、つまり、部下に対して絶対の権力をもっているが、自分自身は無能である人が、理想の人物である」と。その例として、三国志演義の劉備、西遊記の三蔵法師、水滸伝の宋江と、いずれも小説の主要人物を挙げる。

これに応じて山本は、論語、衛霊公の「無為にして治まる者は、其れ舜なるか」を引く。舜は古代の理想的天子。

また、歴史学者である宮崎市定はいう：宋江という

男はいたって無能な人間で、しかも自分の無能をよく自覚しているから、自己の才能を決して他人と比較しない点がいいのだ。(中略)歴史上の人物に譬えをとるなら、漢の高祖劉邦と似たところがある。そして中国はとくにこのような種類の人間を好んで高く評価するのである、と。⁽⁹⁾

石川淳も吉川幸次郎との対談でいう「水滸伝はいいものです。宋江という無能のぼんくらを頭目に祭り上げたのは、おもしろい」と。⁽¹⁰⁾なお石川が「中国では小説は小人の説である」というのは、中国古典文学における小説の地位の低さをみごとに表現したものである。

劉邦が“無能な絶対者”であることを司馬遷が例示したのは、淮陰侯列伝の次の個所であろう。上(高祖＝劉邦)と信(韓信)の会話：

上「わたしは何人ぐらいの指揮ができるか。」

信「せいぜい10万人でしょう。」

上「おまえはどのくらいか。」

信「多ければ多いほどよろしい。」

上「そんなおまえがなぜわたしに捕らえられたのか」(信は上の不興を買って捕らえられ格下げされた)。

信「あなたは兵に将たるのではなく、将に将たる人です。だからわたしはあなたに負けたのです。あなたの才能は天授のもので、人間の力ではありません。」

司馬遷はまた張良に「沛公(劉邦)はほとんど天授なり」といわせる(留侯世家)。

VIII 史記淮陰侯列伝のいくつかの問題

a — 「声を先に実を後に」

兵固有先声、而後実者、此之謂也。(資治通鑑、卷10、漢紀2も同文。漢書韓信列伝は「固」を「故」に作る)の解：

「戦争の場合、別の名目を先に立てて、中味はあとでうばうことも、もちろんありうる、というのはこのことです。」(田中・一海)これは誤りで、次のがましである。

「戦争では、当然示威を先にして、後から実力を使用する場合がございますが、これがそれなのです。」(小川ほか)「示威」より「宣伝」がよい。理由は次のとおり。

趙の旧臣、広武君＝李左車は韓信に兵法を説いていう「北、燕への路に向かい、弁士を遣わして、漢の燕より長ぜるをあらわすに如くはなし。燕すでに従わば、誼言者をして東、齊に告げしめよ。齊かならず風に從いて服せん」と。

“声”とは、言論、情報、宣伝、交渉であり、“実”

とは肉体と武器を行使することである。李左車の教えと反対に“実”の戦争しか知らなかったのが、楚の竜且で、「斉を救うに、戦わずしてこれを降さば、吾、何の功かあらん。今、戦いてこれに勝たば、斉の半ばは得べし」と言い、実力の戦いしか考えていない。そのため韓信に敗れた。

b-劉邦が韓信の軍を奪うこと

君主が臣下の率いる軍隊を奪うとはわかりにくい、どういうことか。

淮陰侯列伝：[漢三年六月] ……漢王、至りて伝舎に宿す。晨、自ら漢の使いと称し、馳せて趙の壁に入る。張耳・韓信は未だ起きず。其の臥内の上に来て、其の印符を奪い、以て諸將を麾（まね）き召して、之を易置す。……漢王は二人の軍を奪うや……。

高祖本紀：[三年] 馳せて脩武に宿り、自ら使者と称し、晨に馳せて張耳・韓信の壁に入り、之が軍を奪う。

項羽本紀：[漢之四（三？）年] ……河を渡りて脩武に走り、張耳・韓信の軍を従う。

以上は劉邦が項羽の前に不利であった時に部下の軍を奪ったことであるが、彼は項羽を打倒した後も同じことをする。

淮陰侯列伝：[漢四（五？）年] 項羽の已に破るるや、高祖（劉邦）は襲うて斉王（韓信）の軍を奪う。

高祖本紀：[五年]、馳せて斉王の壁に入り、其の軍を奪う。

海音寺潮五郎は、漢王＝劉邦がペテンを使って韓信と張耳の軍隊を奪ったことについていう：当時の軍隊は王に属するのではなく、將軍の私兵であって、王といえども、普通では自由にできなかつた。(中略)韓信は二度も同じ手にかかっている。人を信じやすい甘いところのあった人のようである、と。⁽¹¹⁾

田中は解説「項羽と劉邦」でいう「高祖が韓信らの軍を再三うばったことは、天命を受けたと自負するものの威圧と、それを信ずる人間の畏怖との間において、はじめて可能であったろう。」これは高祖＝劉邦という俗物を宗教の教祖のように扱っていて、理解しにくい。ともあれ最後の決戦で劉邦軍の戦力となり、項羽軍を撃滅したのは、韓信たちの部隊である。

c-「先に動くなかれ」

IVで述べたように、將軍＝竜且を失った項羽は、武渉を韓信のところへやって、劉邦から独立し、項羽・劉邦・韓信で天下を三分することをすすめる。韓信は謝絶する。

武渉「足下は項羽と故あるに、何ぞ漢に反きて楚と連和し天下を三分してこれに王たらざるや。」

蒯通がそのあと来て、同じことを韓信に説得する。今度も彼はことわる。

通「若し能く臣の計を聴かんには、両利（楚・漢ともの利益）ありて而も俱に存し、天下を三分して、鼎の足（3本）のごとくして居るに若くはなし。其の勢い敢えて先に動く莫かれ。其勢莫敢先動」資治通鑑、卷10、漢紀2、高帝4年（前203）の条、蒯徹の言も同じ。武渉には「其の勢い云々」の言はない。訳語：

当然のこととして、決して貴殿から行動してはなりません。（田中・一海）

この状況では、先に行動を起こそうとしてはなりません。（小川ほか）

この言葉の解釈が問題である。武渉も蒯通も、この絶好のチャンスをのがさず、劉邦から独立せよ、と韓信に迫る。

武渉「今、此の時を積（す）てて、自ら漢を必して（あてにして）以て楚を撃たんとす。且つ智者たるもの、固より此の若くせんや。」（劉邦を信頼して項羽を撃つのは、智者のすることでない。）

蒯通「蓋し聞くに、天の与うるに取らざれば、反つて其の咎めを受け、時の至れるに行わざれば、反つて其の殃（わざわい）を受く」と。また「曰く、猛虎の猶予するは、蜂蠆の螫を致すに若かず。騏驎の踟躕するは、駑馬の安歩に如かず。……と。此れ能くこれを行うことを貴ぶを言う。夫れ功なる者は成り難くして、敗れ易し。時なる者は得難くして、失い易き也。時なるかな時、再びは来らず。願わくは足下、これを詳（つまび）らかに察せよ。」

韓信は猶予し、漢に倍（そむ）くに忍びず。又た自ら以為（おも）えらく、[我は]功多ければ、漢（劉邦）は終（つい）に我が斉を奪わざらん、と。以上、韓信へのふたりの説得。

ここは「先に動くな」ではなく、「ためらわずに、早く行動せよ」、つまり「先に動け」でなければならぬ。

和田武司・山谷弘之は「其勢莫敢先動」を含む文についていう：項羽・劉邦・韓信3人で天下を三分して、鼎のようになれば、「そうなれば、三者牽制しあつて、手は出せなくなりましたよ」の意である、と。つまり「参分天下、鼎足而居」を条件節とし、「其勢」で「莫敢先動」という帰結節を導くと取るのであろう。田中・小川らが「先に動くなかれ」と、韓信への蒯通の禁止命令と解するのよりすぐれているようである。

史記淮陰侯列伝から「其勢」の用例を拾えば、「井陘の道は狭いから、車は横に並ぶことができず、騎兵の隊列も縦長になる。これで何百里も進めば、補給部隊は遙か後方に取り残される」という内容、原文は「行

數百里，其勢，糧食必在其後。」ここでも条件文の中で帰結節を導いている。(上記III)

まとめ

楚漢抗争期の人物を，史記は上下2段に格付けしている(II参照)。

1 一家(巻53～56)

氏名	職務	思想(各人の世家の記事)
蕭何	文書整理，兵員・食糧の補充	————
曹參	韓信の部下，のち蕭何の後任	其の治要は黄老の術を用う
張良	病弱，実戦の経験なく，作戦だけ	道引(道家式体操)し，穀を食わず
陳平	情報担当，敵(楚)の分裂を計る	黄帝・老子の術を好む

これら4人は，仕事が事務であって戦争でなく，固有の武力をもたず(だから害がない)，道家に心を寄せている(言動が控えめである)ことである。これが高祖=劉邦の，ひいては司馬遷の気に入ったか。この範疇はspiritualな人たち，次の連中はsecularといえる。あるいは，前者はmen of letters，後者はmen of actionであろうか。

2 一列伝

彭越(巻90)・黥布(91)・韓信(92)

この3人の共通点は，自身の有力な軍隊をもち，垓下の戦いに参加して，項羽に対する劉邦の勝利を決定づけるのに貢献し，そして最後は劉邦と敵対して殺されたことである。いわゆる実力者であり，手強い敵対者であった。このことが君主の反発と史家の評価の低さを招いたか。「勇略が主を震わす者は身危うく，功が天下を蓋う者は賞せられず」といった劇通の言は深い意味をもっている。秦代では上述の李斯や蒙恬がこれに当たるか。

資治通鑑を編纂した司馬光は，ところどころで「臣光曰」として，自分の意見を述べている。11年冬の条に，韓信の最期を記述したあと，彼は次のようにいう：

韓信は大策を建て，高祖とともに漢中より起こり，三秦を定め，兵を分けて北し，魏を禽え，代を取り，趙を仆し，燕を脅かし，東のかた斉を撃ちてこれを有ち，南は楚を垓下に滅ぼす。漢が天下を得し所以のものは大抵皆な信の功なり[これが世間の常識的評価]。

其の劓徹の説を拒けしこと，高祖を陳に迎えしことを觀れば，あに反心あらんや。

良(まこと)に職を失うに由りて怏怏となり[天下統一，軍人失業]，遂に悖逆に陥る。それ盧縮は里閭の

旧恩(同郷の好み)をもって猶お燕に王たり。信はすなわち列侯をもって朝請を奉ず[共同社会と利益社会]。あに高祖また信に負う(借り)あるにあらざらんや[劉邦は韓信に恩を受けている]。

臣(司馬光)以為(おもえ)らく：高祖は詐謀を用いて信を陳に禽う。負うと言えは則ちこれ有り。然りといえども信もまたもってこれを取る(捕らえる)あり[韓信は劉邦に反抗したことあり]。始め漢が楚と滎陽にて相拒ぎしに，信は斉を滅ぼして還らず，報じて自ら王となる(V)。其の後，漢が楚を迫いて固陵に至り信と期して共に楚を攻めんとするも，信は至らず[垓下の戦いの前]。是の時に当たり，高祖には固より信を取る心ありしも，ただ力の能わざるを顧みしのみ。

“それ時に乗じて以て利を徼(もと)むるものは市井の志なり。功に酬い徳に報ずるものは士君子の心なり”という。信は市井の志をもって其の身(信自身)を利し，士君子の心をもって人(高祖)に望む。また難からずや[韓信を市井の志の持ち主とけなす]。

是の故に太史公がこれを論じて曰く「仮令(もし)韓信が道を学び，謙讓にして己が功を伐(ほこ)らざれば，則ち庶幾(ちか)からん。宗族を夷滅せられしも亦た直(むべ)ならずや」と(VI)。以上「臣光曰」の内容。

司馬光は司馬遷の見解に賛意を表して，韓信を批判している。

張良について司馬光は，「神仙に託し，人間(ジンカン，にんげん世界)を遺棄した」ことを評価する。また曹參が韓信に従っていた時，70もの傷をこうむりながら，城を攻め地を略したのは，これを賞賛する人が多いにもかかわらず，“一旦の功”にすぎないとし，蕭何が補給に貢献したことを“万世の功”とたたえる。

あとがき

拙稿は，平成12(2000)年度前期，国際文化学科2年次生の授業「アジア地域研究法」において，司馬遷の史記淮陰侯列伝を読んだ経験にもとづいている。テキストは，上記，田中謙二・一海知義『史記一楚漢篇』から取った。本書の体裁は，句読点と返り点つきの原文，訓読文，訳文，語釈からなる。

註

- (1) 元田永孚，明治14年撰『幼学綱要』岩波文庫，1938年。本書は日本と中国の偉人を20の範疇に分け，挿絵つきで解説したもの。古い世代の日本人の道徳や常識となっている。孝行を忠節に優先させたのは，中国的道徳観であろう。

韓信についての覚え書（勝藤 猛）

- 孝行第一，忠節第二，和順第三，（中略） 勉職第二十。
忍耐第十二：張良・韓信。敏智第十五：蕭何。剛勇第十六：樊噲。度量第十八：漢高祖。
- (2) パートン・ワトソン，今鷹真訳『司馬遷』筑摩書房，1956年。
- (3) 宮崎市定『史記を語る』岩波新書，1979年。岩波書店『宮崎市定全集』5。
- (4) 勝藤猛「史記留侯世家の一節について」（『大阪外国語大学論集』9，1993年。）
- (5) 貝塚茂樹『史記—中国古代の人びと—』中公新書，1963年。中央公論社『貝塚茂樹著作集』7。
- (6) 小川環樹・西田太郎『漢文入門』岩波全書，1957年。
- (7) 植村清二『諸葛孔明』中公文庫，1985年。
- (8) 『中国の名将と名参謀』（別冊歴史読本—中国史シリーズ2）新人物往来社，1991年。山本七平（評論家，『論語の読み方』1981年の著者）と駒田信二（作家，東大中国文学科出身）の対談，1982年。
- (9) 宮崎市定『水滸伝』中公新書，1972年。全集12。
- (10) 『吉川幸次郎対談集—中国文学雑談』朝日新聞社，1977年。吉川は京都大学名誉教授，中国文学者。石川は作家。
- (11) 海音寺潮五郎『中国英傑伝』上，文春文庫，1978年。
- (12) 和田武司・山谷弘之『史記IV 逆転の力学』徳間書店，1988年。